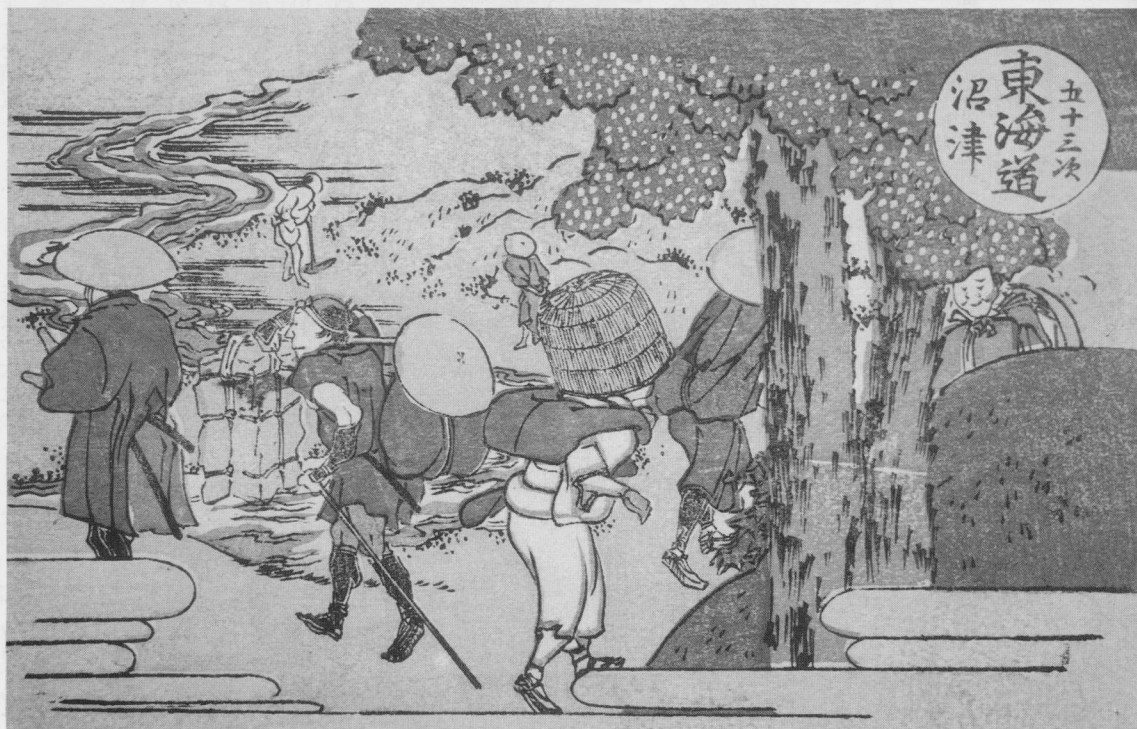


沼津市

明治史料館通信

1998. 10. 25 (季刊 年4回発行) Vol. 14 No. 3 通巻第55号



葛飾北斎画 東海道五十三次 沼津
(沼津市明治史料館所蔵)

虚無僧と

沼津市域の村々

葛飾北斎による浮世絵の「沼津」に虚無僧の姿が描かれている。天蓋(深網笠)を常にかぶり、尺八を奏して托鉢を受ける有髪の僧、虚無僧は、江戸時代、幕府から特典を与えられ、自由に旅すること、武器をたずさえることなどを許された。虚無僧は普化宗という禅宗の一派を形成したが、幕府は武士のみにこの宗派への入門を許可し、浪人取締策に利用した。

普化宗の総本山には武蔵国の鈴法寺(青梅市)、下総国の一月寺(松戸市)、京都の明暗寺などがあり、諸国にはその末寺が約百か寺あった。たとえば、駿河国駿府の無量寺と遠江国浜松の普代寺は一月寺の、伊豆国田方郡大平村(修善寺町)の瀧源寺は鈴法寺の末寺になっていた。従って沼津近辺の宿村にも虚無僧たちがたびたび托鉢に廻ったらしい。

たとえば駿東郡口野村の毎年の村入用帳(口野足立家文書)には、無量寺と瀧源寺への支出が記載されており、虚無僧に対する負担を村でしていたことがわかる。三津

ぬまづ近代史点描 ③⑧

村の古文書には以下のような領収書が残る(三津羽田家文書A-1)。

覺

一 錢五百文 当亥年穀代

一同四百文 亥子兩年分見廻料

右之通髓ニ致寺納候、以上

亥九月二日 瀧源寺用達

桑原市郎兵衛團

三津村御役人中

文政六年(一八二二) 無量寺の

役僧は駿東郡原宿の役人に対し虚

無僧の止宿を三年間差し止めると

の証文を提出した(渡辺八郎家文

書A-12)。不法を働く者が多か

ったからである。

天保六年(一八三五)、現沼津

市内浦・西浦地区にあたる重寺村

他十三か村では、「議定書之事」

(三津金指家文書B-22)という

文書を作成し、瀧源寺の虚無僧に

対する扱いについて協定を結んで

いる。留場(虚無僧の宿泊場所)

の穀物を供出することについては、

大平村からの順達で依頼がなけれ

ば決して出さないこと、虚無僧が

村々を通行する際に理不尽な要求

をするなどのことがあった場合は、

隣村役人も立ち会って解決するこ

と、もしも訴訟沙汰になるようなことになってもこの協定は破らな

いこと、などを定めたものである。

迎え入れる側の村々にとっては、

虚無僧の存在は迷惑なものだった。

近世中期以降には、贅沢な服装

をまとったり、乱暴をはたらくと

いった、虚無僧に扮した無頼の徒

が出没するようになり、それらに

対する取締りや戒告の布達が幾度

か出されている。

特殊な教団であった普化宗は明

治四年(一八七一)に廃止され、

虚無僧は急速に消えていった。大

平村の功徳山瀧源寺は、同村龍泉

寺の奥の院だった観音堂が寛永年

間に独立し普化宗に属したもので

あったが、やはり明治後は廃寺と

なった。現在は平成五年建立の

「功徳山瀧源寺跡・瀧落之曲発祥

地」の碑が立つのみである。



岡本昆石『古今百風吾妻余波』より

シリーズ 沼津兵学校とその人材

51 姻戚関係にみる沼津兵学校の人物 その二

沼津兵学校の教授・生徒たちの少なくない部分が、肉親や姻戚の關係でつながっていた。今回掲載した姻戚關係図で表した以外にも、すでに本誌通巻第23号で紹介した分もある。

ただし、姻戚關係が沼津時代に

結ばれたものなのか、それ以前か

らのものなのか、あるいはそれ以

後のものなのかは、さまざまであ

る。たとえば、沼津病院医師林洞

海の息子西紳六郎(兵学校附属小

生徒)が、兵学校頭取西周の養子

となったのは明治二年、兵学校三

等教授並榎本長裕の弟塩野谷景光

(兵学校第七期資業生)が、兵学

校三等教授高島茂徳の実子が継い

でいた塩野谷家の養嗣子となった

のは明治三年であり、いずれも沼

津時代のことである。一方、兵学

校第二期資業生成沢知行は、義兄

である兵学校一等教授渡部温の自

宅で受験準備をして資業生に及第

しており、兵学校へ入る前提とし

てすでに結ばれていた姻戚關係があつた。また、兵学校での師弟の間柄が後に舅婚の關係になった例、兵学校での同窓生が、やがて自分の息子・娘同志を結婚させた例など、沼津兵学校での人間關係が後に発展した場合も少なくない。

姻戚關係から読み取れる人脈に

は、沼津兵学校という狭い枠内の

みならず、旧幕臣の中の洋学を学

んだ者たちの系譜といったものも

見て取れる。赤松則良・榎本武揚

・松本順の姻戚關係には長崎海軍

伝習所での人脈が前提としてある

し、先程の渡部温と成沢知行とは

開成所時代も共有していた。長崎

海軍伝習所に学んだ中島三郎助・

岡田井蔵と沼津兵学校第九期資業

生で明治海軍の造船分野に貢献し

た白井藤一郎とはともに浦賀奉行

所の与力・同心出身であつた。

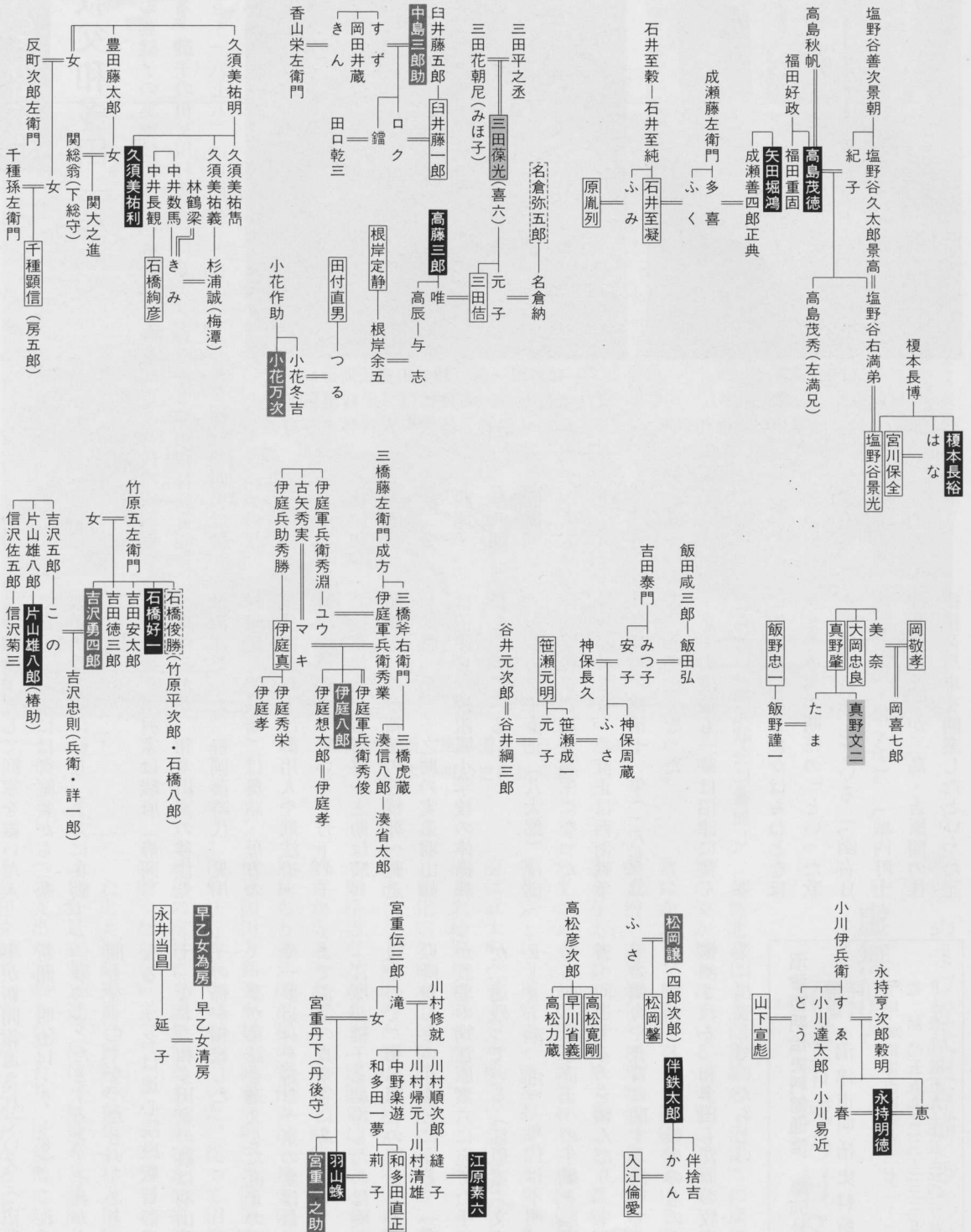
姻戚關係と職務・学問の共通項

とは、どちらかが接着剤となつて

どちらかを招来したといえる。

沼津兵学校・附属小学校教授・軍事掛
 沼津兵学校資養生
 沼津兵学校附属小学校生徒

静岡学問所関係者
 沼津病院・静岡病院関係者
 箱館戦争参加者



江原素六とその周辺(31)

叔父和多田一夢

江原素六の妻縫子の実家は旗本川村家である。縫子の祖父川村修就(二七九五〜一八七八)は、御

庭番から身を起こし初代の新潟奉行をつとめたことで知られる有名な幕吏であった。修就の四男で縫

一夢は養子として同家を継いだ人である。幕末には御庭番から二条城御門番之頭に転じ、上方に在勤したらしい。

維新後、川村家は駿府(静岡)

へ移住したが、和多田家の移住先は沼津だった。静岡藩時代、兄川

村帰元(清兵衛)は奥詰、母方の

叔父宮重丹下は御用人や刑法掛・

権少参事になっている。丹下の子

で従弟にあたる宮重一之助は騎兵

頭並だったが箱館の五稜郭へ脱走

して戦った。一之助の実弟羽山蛭

は沼津兵学校附属小学校の体操教

授となっている。

一夢の息子直正(八太郎)は沼

津兵学校第八期資業生になった。

陸軍将校となった直正は西南戦争

に出征し、明治十一年(一八七八)

若くして亡くなった。

息子の没後も一夢は沼津に住ん

だらしい。地元歌会に参加し、「峯

に生ふる松は昔にかはらねとなほ

色まさる雪の明ほの」といった歌

を新聞に投稿している(『函右日

報』明治13・12・7)。「城内町士

族和多田氏」が三島・吉原間の往

復積荷馬車を開業したといった記



和多田家の墓

(真楽寺 1988年撮影)

左の墓石には「陸軍少尉試補和多田直正墓」と彫られている。



和多田一夢 (和多田寛氏所蔵)

ガラス板写真。箱書には「于時慶応元乙丑年夷則廿四日 於大坂表我軀ヲ写身鏡ニ而取 写身」とある。

- 子の叔父にあたる人
- 物に和多田一夢(金四郎・与八郎、直筒、一八二九・九二八・八一・八・二三)
- がいた。和多田家も御庭番の家柄であり、

事が新聞報道されている(『沼津新聞』明治14・7・8)。これが一夢のことだとすると、それから間もなく亡くなったということになる。法名は速心院殿釈智静居士。なお、和多田家の跡は羽山荆子の孫が相続した。

一夢が墓誌を選文した直正の墓や一夢自身を含む一家の墓は最近まで沼津の真楽寺にあった。

江原が縫子と結婚したのは廃藩以降からということになる。一夢が義理の甥江原素六に宛てた手紙が二通残っている(江原素六文書E-a-709, 710)。年代は不明であるが、息子直正への手紙を陸軍省へ回送するのを頼んだり、牛や羊の飼育や売買に関する内容であり、明治ヒトケタ後半のものと推測される。和多田も江原の牧畜業に出資していたらしい。

沼津市明治史料館通信 第55号

編集 沼津市明治史料館

発行 沼津市明治史料館

〒410-0051 沼津市西熊堂三七二-1

電話 〇五五九-三三三三三五

FAX 〇五五九-二五三三〇一八